

女性のスポーツに関する勉強会（平成28年度） の主なポイント

【女性のスポーツ実施率の向上】

（インサイト調査）

- 1 インサイト調査で深掘りをして、阻害要因等を明らかにしたうえで、子供たちと、スポーツを実施していない女性の層にターゲットを絞って、数十万人規模でポピュレーションアプローチを行うことが必要。

（イメージ戦略 例：「アクティブ・ガール」）

- 2 「アクティブ・ガール」イメージ戦略を取り、“かっこいい”アクティブ・ガールのイメージを女兒や保護者に対して浸透させ、イメージ転換させるのが良いのではないかと。また、女性アスリート、女性コーチへのメディア教育を行い、例えば、オリンピックのメディアでのコメント等も、ただ単に、エンターティナーとして消費されるだけではなく、どのように映るかを意識したものとする必要がある。「アクティブ・ガール」イメージ戦略には、少女たちの「声」を聞き取る調査が必要で、何を求めているのかを知る必要がある。

（キャンペーン活動）

- 3 スポーツに無関心者を含むスポーツを実施していない成人女性層に、「This Girl Can」や「Active Girl」等のキャンペーン活動をナショナルレベルで行うことが必要。

（インフルエンサーの育成）

- 4 地域レベルや各学校で、身近なインフルエンサーを育成していく取組が必要。

（阻害要因の特定）

- 5 いかに関障を取り除くかというところで、SNSのキャンペーンを始めた。日本特有の女性の運動を阻害する障壁が何かを突き止め、施策につなげていきたい。

（女子児童と保護者のニーズや意欲等の調査）

- 6 小学校女子について体を動かす環境、思考、求めている活動、保護者がどういう環境を選択しているかも含めて調査し、手立てをすることが必要。

（学校体育の種目拡大）

- 7 子供に対するアプローチをする必要がある。スポーツに関心・無関心関係なく、全員揃うのが学校であるため、ここで、フィジカルリテラシーや体育授業を、女子が参加しやすいものとする必要がある。
- 8 体育授業では、現状は「より速く、高く、遠く」へ機能する身体が評価され、第二次性徴の女子の身体変化には、不利なものが多い。そのため、ヨガやピラティス、ゲーム性のある身体活動などを、体育種目に拡大することが必要。

(部活動の柔軟な日程)

- 9 塾があるから毎日参加できないため、部活ができないという生徒が多かった。そこで、毎日部活に来なくてもよいということにしたら、参加者が倍増した。その提案を行ったのは女性教員であった。パワーを持ったルール作りと、ターゲットの興味関心に寄り添う挑戦が必要。

(高齢者)

- 10 高齢者は、健康についての意識が高いので、個々のレベルで、引き続き健康施策の中で位置付けてやっていくのがよいのではないか。

(学校施設の民間開放)

- 11 スポーツの普及という観点では、施設の利便性が重要である。現在は、団体等に所属していないと、スポーツ施設を気軽に使えない状況である。校庭・体育館・プールを備えている学校施設を、民間等を使って開放してはどうか。

【女性のスポーツ医科学の普及啓発】

(ジュニア期の女性アスリートのための女性スポーツ医学の普及啓発)

- 12 過度な運動によるもので、無月経・摂食障害エネルギー不足・疲労骨折等の症状があり、受診環境の整備が必要な状況がある。また、中学・高校の部活動指導者の啓発が必要であることが産婦人科医の共通認識であり、医師会と学校が連携すべき。

【あらゆるハラスメントの防止】

(ハラスメントの防止)

- 13 セクシュアルハラスメントや体罰でニュースになるものは、氷山の一角であり、実際はかなり多く、確実にスポーツ離れの要因となっている。セクシュアルマイノリティの問題は、体育の時間に考慮されず、本人が困っている等の問題がある。

【女性のスポーツ指導者の育成及び登用】

（コーチングを学ぶ機会の提供）

1 4 競技から完全に離れると難しいため、現役中からコーチングを学ぶ機会の提供が必要であると思う。

1 5 アスリートである期間は競技に集中しているため、辞めてすぐにスポーツ指導者になることは困難を伴う。日本はリーダー教育の普及が進んでいない。

（コーチ見習い制度）

1 6 コーチ見習い制度があれば、コーチになる前に多くの経験を積むことができるのではないか。

（ロールモデルの提示）

1 7 引退した選手（特定競技のトップレベル）になぜスポーツ指導者にならなかったかを聞いた結果、「女性でスポーツ指導者をしている人が回りにいなかったから」が回答の1つとして挙げられた。

1 8 指導者になる道は様々であるため、よりたくさんのロールモデルを提示し、後進の参考にできるようにすることが必要。

（出産等のライフイベントに配慮した指導者資格制度の整備）

1 9 指導者資格更新の免除等、結婚・出産が指導者キャリアを歩む上でのハードルにならないように工夫が必要。

2 0 現役中から指導者資格を取らせる団体もあるが、団体により方針がマチマチ。女性は出産・育児等もあるため、資格を失わないような考慮が必要（更新料を払い続けないと失効してしまう部分等）。

2 1 アスレチックトレーナーは、大学等で資格を取って3年後の更新時に費用負担もあるため更新をしていない方が多い。厳格な3年更新の制度も影響しているため、30代以降も継続できるような環境整備が必要。

（多様な指導機会の提供）

2 2 スポーツの指導現場とコーチ志望者をつなぐ仕組みづくりが必要。

2 3 女性指導者は「時間・場所」「集客・管理」「指導レベル」に関して多くの課題を抱えている。その課題を解決するためにアプリケーション上で指導機会を提供する例もある。